

## 集団ヒステリーの文化??

四国に1年間滞在したことがあり、現在も公私にわたり年に何度も来日している私ですが、8月23日の米国東海岸の地震が生まれて初めての“地震”体験でした。

最初に揺れ始めたときには、地下鉄の駅のプラットフォーム上に立っているような気がしましたが、揺れが烈しくなるにつれ、やっと鈍い頭が働くようになって「あっ、これは地震だ」と認識しました。初めてのことだったので、何を持ってどこに行けばいいか、まるで見当が付きませんでした。日本が3月11日に体験した地震に比べたらまったく小さな地震だったはずですが、“永遠の揺れ”を感じるその瞬間には顔がこわばりました。私は部屋に留まりましたが、大勢の人が急いでビルの外に逃げ、道が人混みで混雑するほどでした。震度で言えば3～4程度だったようですが、地震に慣れていない大衆はパニック状態になっていました。

地震の余韻がまだ冷めやらぬ8月27日から28日にかけて、今度はハリケーン・アイリーンが東海岸に上陸しました。ハリケーンに備えて、ほとんどのビーチが閉められ、浸水しないように地下鉄のドアの前に土嚢が置かれたり、莫大な数の人がスーパーで水と長持ち



する食品を買ったりしました。ニューヨーク市では、地下鉄が完全にシャットダウンになったそうです。

しかし、少なくともワシントンDCでは、それらの準備は過剰反応だったようで、アイリーンによる実際の被害はほとんどなかったのです。被害といえば、13階にある私のマンションが雨漏りしました。冗談みたいに、ちょうどベッドの枕の上に落ちるように滴が天井から落ちてきました。天誅かなにかかっていたと思いましたよ。

続いて、「9/11」の10周年記念日がやってきました。ジハードの聖戦実行者のいくつかのウェブサイトには、ビン・ラデン暗殺の復讐を果たしたいというようなことが書いてあったりしたそうです。彼らが記念日に何かを実行するつもりであるかのようにみえたことから、アメリカの警察やFBIが必死に活動を繰り広げ、テロ防止のために活躍しました。たとえば、見つからない白いバンを探し出すため、白いバンをことごとくチェックしてい

たそうです。大衆の方は、街に出るとテロに会うかもしれないとして、家に閉じこもっていた人もいたようです。

結局は何も起こりませんでした。11日にニューヨークとワシントンDCのテロ事件現場で式典が行われましたけれど、全てが平穩無事に終わりました。

このように、何故かしら最近のDCでは、集団ヒステリーのきっかけが多く発生しています。地震が起こってパニックになる人々、ハリケーンやテロを恐れすぎてパニックになる人々。アメリカでの集団ヒステリーは恐ろしいと思います。

そんな折、先日観た映画が「Contagion」(接触感染の意味)でした。その映画(日本未公開)は、政府が力を徐々に失ってアメリカ国民が暴れてしまう集団ヒステリーをとってもリアルに表現していました。

私はその映画を観ながら、2009年の新型インフルエンザを思い浮かべました。インフルエンザの蔓延が恐れられていた折の5月に来日するため、私は全日空便に乗って成田空港に到着しました。空港の検疫処置が怖くて埃を飲み込んでも絶対咳をしないといけないと焦っていましたが、結局、私は問題にはならず、私の4列後ろにいた乗客の一人が症状を示したようで、その人の列から私のすぐ後ろの列の乗客は全員隔離されてしまいました。私はかろうじて隔離の災難を免れたのです。もしもう1列後ろに座っていたなら、日本での仕事は全てキャンセルしなければならなくなるばかりか、ホテルに1週間、缶詰状態になるところでした。

そのときに印象的だったのは、大部分が日本人の乗客だと思われましたが、彼らは粛々と秩序だった行動をとっていたのです。当時の日本は安全を求めて問題を正しく制御したと思います。アメリカで同じことをしたとすれば、もっと乗客はパニックになっていたでしょう。



東日本大震災直後の日本人の行動がとても落ち着いていたことが世界を驚かせましたが、私はインフルエンザの検疫のときの経験があったのでそれほどには驚きませんでした。

今回の東海岸の地震のレベルではなく、東日本大震災レベルの問題にもし巻き込まれたら、自分はどのように反応するでしょう？一歩退いて事態を客観視し、ゆっくり考え、いわゆる道徳に従う道を歩むだろう、と思いたいのですが正直に言って私には自信がありません。私だけでなく、ほとんどのアメリカ人は日本人よりパニックに弱いと思います。

日本の思慮深い文化・対応を米国人に教える方法がないのでしょうか。自分の命が危ないほどの大地震の直後でも冷静に動ける日本人を模倣することができたら、アメリカはもっと良い国になるだろうと思います。

### 筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学(DC)で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町(現在三豊市)の国際交流協会にて一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メーソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ蜚が身を焦がす」。